

Oil Tomy Jr.

●「人類の月面着陸は無かったろう論」 副島隆彦著・徳間書店・2004

★★★☆☆（期待通り）

1969年7月のアポロ11号から17号までの6回に及ぶ12人の月面着陸は実際には行われず、全てはアメリカの国家的捏造だったという説です。

既に2001年に米・FOX-TVが米国内で「Did We Land on the Moon?」という番組を制作・放送し、2002年に日本でテレビ朝日「これマジ!?!」で1月から4月にかけて3回にわたってとり上げており、このうちのどれかを私も見ました。2002年10月にはヨーロッパ各国で「オペレーション・リューヌ」という番組でアメリカ政府関係者らの内部告発を収録した番組が放映され日本では2003年大晦日にテレビ朝日「ビートたけしの世界はこうしてダマされた!?!」でその一部が紹介されたそうです（これは私は見ていません）。本書における著者の主張は下記の通りです。

- ①35年前の1969年当時は勿論、現在のテクノロジーを駆使しても、人類を月に送り、無事に帰還させることは不可能である。
- ②当時の米・ニクソン政権は、ソ連との宇宙開発競争上および泥沼のベトナム戦争から国民の目をそらす必要上、月着陸の捏造を指示した。

このうち、①の論拠として、次の2点を挙げています。

◆例え無人であっても月面への軟着陸はジェット噴射コントロールでは無理。ましてや月面からの再発射、月軌道上でのドッキング、地球への帰還は現在の人類の技術を総動員してもできない。

◆そもそも生物が地上3千kmと3万kmに取り巻くバンアレン帯を越えて生きたまま外宇宙に出ることは放射線やフレア（太陽風）で不可能。

であれば、あのアポロの映像や月の石、反射鏡などの存在については？

◆アポロの映像には既に下記のような様々な不審点が挙げられ、これに対して確たる反証がなされていない。因みに、信じられないが宇宙飛行士達が等身大の高さから撮った写真（静止画）は1枚も公表されていないのだという。また、NASAが1枚だけ公表している

「月から写した地球」という写真は専門家の間では合成写真であることが判明しているとの事。

- ・アポロの月面からの写真には星が全然写っていない。
- ・6回とも違う場所なのに、背景が全く同じ。
- ・光源は一つ（太陽）しかないはずなのに、影が複数あり、着陸船の影が写っていない。
- ・着陸船の真下に逆噴射の跡がまったくなく、きれいな砂のまま。
- ・飛行士の肩から落下する小物体（砂埃？）の速度が速すぎる。
- ・無風のはずの月面で星条旗がはためいている。

◆月の石についても、その分析結果から何も新たな発見がなされておらず、専門家は宇宙線によるマイクロレーターが全くないため疑問視または「あれは月の石ではない」と言明している。ある成分分析によればアメリカ南部の砂漠の石に似ているらしい。

◆アポロが置いてきたとされる反射鏡は、現在計測で使用もされているが、これは無人の探査機によって月面に放出可であり、ソ連が実際に月面に衝突したロケットから置いてきたものもあるとのこと。

さらに、関係者が上記の番組で次のような証言をし始めているそうです。

◆当時のNASAの最高責任者ウォルターズ将軍が「アポロ計画ではとても人類を月には送ることができない」とホワイトハウスに具申して意見を求めたところ、ラムズフェルド、キッシンジャー、ヘイグの3氏が捏造を具申、ニクソンが決断したことを、ウィルターズ、ラムズフェルド、ニクソン大統領の秘書などが番組で証言しているという。

◆故スタンリー・キューブリック監督の夫人も夫の遺品からNASAのトップシークレット文書が出てきて、夫はアメリカ政府の依頼でロンドンの撮影所で月面の宇宙飛行士の撮影をした、と同番組で証言したという。

（NASAの映像はロンドンの撮影所とアメリカのネバダ州で撮ったらしい）

◆当時のソ連スパイもこの番組で「KGBは、アポロ月面映像で、ドイツ製のカメラを何も被服が施されていないまま飛行士が手にしているのを確認した時点で、アメリカの月面着陸はなかったことに気づいた」と証言したとのこと。因みに著者はソ連のそれまでの宇宙発表についても多くのウソがあることを指摘しており、そうだとすればお互い様だったと言える。

これらをもとに、著者はアポロ計画は存在し、またアポロと名乗るロケットが月に行ったかもしれないが、それらは月面に衝突して残骸になっており、飛行士は実際は地球の周回軌道から先へは出ていないと結論つけています。そして、この見解を否定する側に対して次の4点を主張しています。

1. NASA が公開している月面歩行の映像の信憑性の証明。
2. 35 年前に 6 回も成功したなら、もう一度実行して欲しい（再現性証明）。
3. 月面を精細に撮影し、アポロが残したはずの痕跡（着陸船脚部や月面走行車、アメリカ国旗等）を写して欲しい（ハッブル望遠鏡を使えば可能なはずだが、アメリカは月面の精細撮影を許していないとのこと）。
4. ロケットの月面への軟着陸と再発射の再現（できないはずだと主張）。

私は最初、「まさか」と思って読み始めましたが、今では「あれはどうやら作られたファンタジーだったようだ」と考えざるを得ないようになりました。

●「原爆を投下するまで日本を降伏させるな-トルーマンとバーンズの陰謀-」

鳥居 民著・草思社・2005

★★★☆☆（期待通り）

本書は、これまで定説とされてきた下記の2つの常識を覆す。

- ①日本がポツダム宣言を無視したことによりアメリカは原爆投下に踏み切った。
- ②原爆は（本土決戦によって失われたであろう）100万人もの若いアメリカ兵の命を救った。そして著者はこの2点が実際はこうだったと主張する。
- ①トルーマン大統領はわざわざポツダム宣言の内容を変えて日本が受諾しないようにした。
- ②アメリカは原爆を投下するまでもなく戦争に勝利することができたし、またその事を知っていた。

まず①の点だが、トルーマンは6月15日に開催可能だった首脳会談をチャーチルの大反発を押し切ってまで7月17日まで1ヶ月も遅らせた。

またアメリカは日本が降伏する絶対条件として天皇の地位保全が欠かせないという事を把握していた。

そこで陸軍長官スティムソンはポツダム宣言の草案（第12条）にそれを入れていたが、大統領のトルーマンと国務長官のバーンズはこの条項を敢えて削除した。

さらにアメリカは日本がソ連に講和の仲介役を期待していた事を知っていた。

従って、共同宣言文にソ連が署名していたら講和の望みを絶たれた日本は降伏する確率が高いということを知りながら、トルーマンとバーンズは、当初宣言文の草案で共同署名国に入っていたソ連を敢えて削除した。つまり、一刻も早く日本を降伏させたいとは思っていなかったどころか、全くその逆に降伏させないようにしていたのである。

また②の点だが、アメリカは日本の石油備蓄量や戦災による工業生産量の激減、食料の需給予測等から、早ければ1945（昭和20年）年末、遅くとも1946年半ばまでしか日本が戦争を継続するだけの国力を既に有していないことを知っていた。

またルソン島、硫黄島、沖縄の戦いにおけるアメリカ兵の戦死者は3万人に満たず、九州上陸作戦の犠牲者予測でも6万人とされており「100万人の命を救った」というのは現実離れした数字である。

いずれにせよ、原爆など投下しなくとも、既に日本は戦争を継続することができない状態にあり、アメリカはその事をよく知っていたのである。

では、トルーマンとバーンズは何故、そんな行動を取ったのか？その答えは1つ．．．「人類初の原爆を投下し、実際に人の住む都市を丸ごと消滅させること」が目的だったからである。

そして、その理由を著者はこう結論付けている。

- ①巨額の予算を費やした原爆を使う前に終戦となった場合の議会からの非難を避ける必要があった。
- ②共産主義勢力の旗頭であるソ連に対し、アメリカの武力的優位を見せつける必要があった。
- ③ルーズベルトの死によって棚ボタで大統領になったトルーマンは自身の権勢を示したかった。

著者は、トルーマンとバーンズが意識したであろう次の4つの日付から、その謎解きを展開している。

- ①原爆実験予定日（当初予定は7月4日、実際には7月17日に実施）
- ②三国首脳会談開始日（当初6月15日が有力だったが7月15日に延期、実際には17日に変更）
- ③原爆投下準備完了日（8月1日）
- ④ソ連の参戦予定日（トルーマンらは8月8日と推測、実際には8月9日に参戦）

トルーマンはスターリンに対して原爆の保有を直接会ってほのめかすために、②は①の後でなければならなかった。

そして、日本の降伏は③より前であってはならなかった。

もし③より前に日本が降伏して戦争が集結してしまったら、原爆は「戦争が終わるまでに間に合わなかった役立たず兵器」になってしまう。

それまで議会に内密で膨大な予算を費やして進められたルーズベルトのマンハッタン計画（原爆開発計画）が議会から猛烈な非難を浴びる事は何としても避けたかった。従って、④は③より前に来ては困るのである。何故ならソ連が参戦したら、ソ連に講和の仲介を依頼している日本が望みを失って降伏してしまい、原爆を投下するタイミングを失ってしまうからである。

果たして、トルーマンとバーンズのスケジュールは、ほぼ計画通りに進行した。

日本は共同宣言をに天皇の地位保全が明記されていないために受諾することができず、トルーマンに原爆投下の口実を与えた。

2種類の原爆は計画通り予告無しで2都市に投下され、世界にその威力を見せつけた。そして、ソ連の参戦によって日本は最後の頼みであった講和の望みを失い（もともと望みが無かった事を思い知って）ポツダム宣言を受諾し、戦争は終結した。

結果として、原爆は「戦争を終結に導き多くのアメリカ兵の命を救ったヒーロー」となり、トルーマンはその勇断を下した荣誉ある戦勝国の大統領として歴史に名を刻むことが出来た。冷静にこれらの事情を鑑みれば、原爆投下は人類史上に残る恐るべき戦争犯罪に他ならないことが分かる。

しかし、それでもなお私はこう思う。

もし、アメリカではなく、日本が原爆を手にしていたら...

その恐るべき戦争犯罪を犯していたのは我々の方だったに違いない。

「戦況を一気に逆転する神風兵器」として、米国各地に落としまくっていたことは日本人なら誰も想像に難くないだろう。

従って、この本の内容が全て真実だったとしても、アメリカが日本よりも悪だったとは言えない。私は、そこに戦争の持つ犯罪性が表れているように思えてならない。

●「アメリカの鏡・日本」

ヘレン・ミアーズ・著・伊藤延司・訳、メディアファクトリー・1995

★★★★★（期待を大きく上回る）

終戦直後の1946年にGHQ労働局諮問委員会メンバーとして来日し日本の労働基本法立法に携わった米国人の女性東洋学者が1948年に出版し、マッカーサーが翻訳出版を禁止したため日本語版が出版されず、著者の死後6年を経た1995年に日本語の初版が出たと

いう、いわく因縁つきの本である。今年（2005年）に入って角川書店から新版と抄訳版が出版されている。

本書は太平洋戦争以前の日本の植民地政策に多くの紙数を割き、これらは全て欧米のやり方を学び当時の国際ルールと慣行に則って正しくトレースしたに過ぎないのに、これを快く思わない欧米各国がダブルスタンダードの下に日本を一方的に非難したと述べている。この欧米各国のアンフェアさを厳しく、しかし冷徹に、そして論理的に、あくまでも理路整然と指摘しているが、自国をこれほどまでに第三者的に客観視して批判できることで、私は逆に著者を育んだ母国アメリカのフェア精神の偉大さに感服の念を覚えてしまう。

本書のタイトルの意味は、現代史における日本の姿を鏡として、そこに写し出されるアメリカの姿を抉り出すというもの。従って、本書はアメリカ人に向けて書かれた本だといえる。そしてその主旨は、日米戦争とそれに至る経過をアメリカ側の国際戦略と軍事戦略という視点で再確認し、対日戦争のあらゆる時点におけるアメリカ側の対応について疑問を投げかけている。

パールハーバーは避けられたはずであるという点から、日本を占領する必然性や本土空爆の戦略的意味、原爆投下の必要性や戦後処理での倫理的社会的なアメリカの二重基準についてまで、実に鋭い論旨で抉っている。これは日本人にとっては目から鱗の連続であり、またアメリカ人にとっては、余りにも耳が痛過ぎる話の連続であろう。本書の出版を機に彼女が本国で冷遇され表舞台から実質上干されてしまったという事も大いに頷ける。逆に言えば、我々日本人にとっては本当にありがたい存在である。

全編を通じて貫かれる著者ミアーズのフェア（公平）な態度は全く驚嘆に値する。一例を挙げれば、第4章「伝統的侵略性」において、米国の平均的な認識および教科書で教えられている日本人観としての「伝統的軍国主義者かつ世界で最も残虐な侵略者」という日本人像を次の様に一蹴する。

「二千六百年の間」「世界征服」を目指してきた「世界で最も残忍な侵略者」が、かつて「一度も敗れたことがない」のに、パールハーバーの時点で、わずかに先祖伝来の小さな列島と、周辺の小さな島々と朝鮮半島から成る小国にすぎなかった、などという話があるだろうか。 -

そして、米国のあらゆるメディアや学者達のご都合主義で発した歪んだ日本観、日本人観をことごとく論理的かつ冷静に論破している。その歴史認識の深さや文化的な理解度は我々日本人以上に日本人の精神風土に裏打ちされたものであることに驚かされる。また、戦争終結や原爆投下に関しては次の様に述べている。

- 私達は経済封鎖によって日本の補給路を遮断したから、戦争に勝てたのである。日本の本土を爆撃する事で勝ったのではない。これはほとんど反論の余地なく証明できる。

-

- 私達は和平支持派に反対勢力を説得する時間的余裕を与えなかった。私たちはたった十一日間待っただけで、いきなり一発の原子爆弾を、そして二日後（三日後の誤記）にはさらにもう一発を、戦艦の上でもない、軍事施設の上でもない、頑迷な軍指導部の上でもない、二つの都市の約二十万の市民の上に投下した。しかも、犠牲者の半数以上が女子供だった。 -

- （米戦略爆撃調査の）報告は、原子爆弾が投下されなくとも、あるいはソ連が参戦しなくても、また上陸作戦が計画ないし検討されなくとも、日本は一九四五年十二月三十一日以前、「あらゆる可能性を考えに入れても一九四五年十一月一日までに」無条件降伏をさせていただろうという意見を付けている。 -

- 日本政府は少なくとも一九四五年五月に降伏の打診をしているが、この打診は米政府によって公式に無視、あるいは拒否された。 -

- （陸軍長官の）スチムソンは、日本が降伏しない場合は十一月一日に本土上陸する事を決定していたと述べている。そしてこの作戦では「米軍だけで百万の死傷者」を覚悟していたというが、これは恐ろしい決定である。これあdけの命がかかっているのに、私達は降伏するつもりの日本のスポークスマンを受け入れて降伏の用意があるかないかを確かめようとしなかった。 -

これらの考察から、

- もし私達がポツダム会議で日本の意向を聴取していたら、ポツダム宣言も、原子爆弾も、本土上陸作戦も必要なく、降伏を準備できたように思われる。 -

と結論付けている。戦後 60 年を機に太平洋戦争についての考察が国内外で行われているが、本書は日本およびアメリカの全国民が一読する価値のある本だと思う。また、改めていまのアメリカのイラク統治の問題を考える上でも貴重な書だと思う。